

<付記>

本論は、「シンボリック相互作用論の方法論的立場」鹿児島大学法文学部紀要『経済学論集』第79号<sup>i</sup>に対する査読の結果、『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』Vol.6 no.2に掲載されたものである。

本論に対しては、匿名の査読者より、数多くの「課題」が寄せられた。その「課題」に十全に応えるためには、本論を全面的に書き直す必要があると判断し、本論の続編として<sup>ii</sup>、以下の論文を作成・公開した次第である。

Tsukasa Kuwabara and Kenichi Yamaguchi, An Introduction to the Sociological Perspective of Symbolic Interactionism: Revised Edition.<sup>iii</sup>

なお、上記の論文は、2013年3月公刊の以下の雑誌に所収予定である。

鹿児島大学法文学部紀要『経済学論集』第80号。  
*Journal of Economics and Sociology, Kagoshima University*, 80.

<訂正>

19頁、第1段落、上から4行目～5行目

訂正前：とりわけ、その分析枠組に関しては、……

訂正後：とりわけ、その分析枠組に関して、……

21頁、第2節の表題

訂正前：「感受概念」としての社会観

訂正後：自然的探究法<sup>iv</sup>と感受概念

22頁、上から6行目

訂正前：ストラウスらによれば、……

訂正後：A.L.ストラウスとB.G.グレイザーによれば、……

26頁、注31

訂正前：<http://……/19700121/phd14.jpg> ～ <http://……/kuwabara/19700121/phd15.jpg>

訂正後：<http://gyo.tc/NEL4> ～ <http://gyo.tc/NEL9>

26頁、注32

訂正前：<http://……/kuwabara/19700121/phd29.jpg>

訂正後：<http://gyo.tc/NELG>

26 頁、注 33

訂正前：<http://...../20100918/phd13.jpg> ～ <http://...../kuwabara/20100918/phd14.jpg>

訂正後：<http://gyo.tc/NELJ> ～ <http://gyo.tc/NELK>

28 頁、上から 13 行目～14 行目

訂正前：そのことについて、例えばメインズらは、……

訂正後：そのことについて、例えば D.R.メインズと T.J.マリオーネは、……

32 頁、注 52

訂正前：……[kuwabara/doctor4.htm](http://kuwabara/doctor4.htm)】。

訂正後：……[kuwabara/doctor4.htm](http://kuwabara/doctor4.htm)】（=<http://gyo.tc/NEKS>）。確かにブルーマーは、自然的探究法における検証プロセスについては、本論で明らかにされた以上のものを提示してはいない。しかし、検証基準については、必ずしもそうではない。本論 23 頁・注 16 において言及した、彼の 1931 年発表の論文「概念なき科学」は、その後、彼の 1969 年公刊の著書『シンボリック相互作用論』（Blumer 1969=1991）の第 9 章として再録されているが、この論文（章）においてブルーマーは、科学一般の検証基準として、環境（＝現実の世界）の理解とコントロールを示唆している（桑原 司、2003 年「ブルーマー『シンボリック相互作用論』」中野正大・宝月 誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社、286 頁）。この「理解とコントロール」という着想は、その後、ブルーマー自身による自然的探究法に関する議論においては影を潜めることとなるが、筆者はこの着想に、ブルーマーの方法論の再読を通じた、自然的探究法における「検証基準」設定の可能性を見いだしている。

---

<sup>i</sup> <http://hdl.handle.net/10232/14999>

<sup>ii</sup> 下記論文の 9 頁 [注 32] を参照のこと。

<sup>iii</sup> <http://www.webcitation.org/6Eae3O3N9>

<sup>iv</sup> なお、本論において「探求」となっている箇所は、すべて「探究」の誤りである。